

1

本書は、その副題に「日本における『公教育』思想の源流」とあるように、日本における公教育の特質、言い換えれば、国家と教育とのつながりの特質を、近世思想の中に探ろうとするものである。しかもその試みが、序章 儒学における教育思想の基本的特質——朱子学を中心に——、第一章 荻生徂徠の教育思想、第二章 折衷学の教育思想——細井平洲を中心に——、第三章 天明・寛政期における徂徠学——亀井南冥の思想と教育——、第四章 亀井南冥の学校論と福岡藩校、第五章 寛政異学の禁をめぐる思想と教育——正学派朱子学と異学の禁——、第六章 国家主義的教育思想の源流——後期水戸学の国家意識と統合論——、終章 結語——統合と教育を中心に——、という章立てからも明らかなように、徂徠学の出現というインパクトを受けた後の儒学者たちの思想の検討を通して行われているところに本書の特色がある。なお以下において本書評は「1」において藤本が第一章から第五章までを、「2」において桂島が第六章を、それぞれ分担して論じていく。

(中略)

2

以下では第六章 国家主義的教育思想の源流——後期水戸学の国家意識と統合論——について取り上げていきたい。言うまでもなく、後期水戸学については、尾藤正英氏の「水戸学の特質」(『岩波日本思想大系・水戸学』所収)が著されて以降、徂徠学の影響が指摘され、旧来の朱子学的大義名分論に連なる思想とする説が改められて今日に及んでいる。辻本氏も基本的にこの見解を継承して持論を展開されているが、前章までの論旨からすると注目すべき論点が提出されていることに気付かされるはずである。すなわち、辻本氏は、徂徠学からさらに折衷学・正学派朱子学の統合論・教化論の系譜の帰結として後期水戸学を位置づけているのである。本章自体では、このことが明確に語られているわけではない。しかしながら、本書を読み進んできた者にとって、何よりも本書の最終章に後期水戸学が位置していること自体によって、そのことが明確に看取されることになるわけである。結語の部分で辻本氏はこのことを次のように述べている。「朱子学(正学派朱子学)の『学統』の論理は、後期水戸学の名文論につながる。……後期水戸学は、正学派朱子学の統合論を国家論的に再構成し直し、国家的集中と動員のイデオロギーを再構築したとみることができる。」(三四〇～一頁)

後期水戸学の研究状況に照らすならば、この広い流れに立っての論点こそ、まずこれまでの学説を革新するものであると評しうるであろう。尾藤氏が徂徠学の影響を見たことに加えて、さらに寛政期の思想状況こそ好機水戸学と密接な関連にたつ前史であることが主張されているからである。こうした論点は、ひるがえって最近藤田寛氏などによって寛政前後の朝幕関係の変容を幕末の前史として捉える視点が提出されている(「寛政期の朝廷と幕末」『歴史学研究』五九九号)ことに関連させるとなかなか興味深いものがあると言えよう。藤田氏は、政治史の観点からではあるが、寛政期の祭祀の復興や松平定信の大政委任論の表明、幕府による対外問題の朝廷への異例の報告等が、いずれもきたるべき幕末の朝幕関係の「予行演習」的意義を有することを明らかにしているが、思想的にこれを捉え返すならば、寛政期を一つの画期として新たな国家論が胚胎しつつあったということであり、この意味でも後期水戸学の統合論や国家論の前史が当然にも想定されてしかるべきであるからである。辻本氏の論点は、したがって今後の後期水戸学研究の今後の進展とも絡めつつ、さらに継承・深化させられるべきものであると言わなければならない。

とは言え、後期水戸学に限定して考えてみると、いくつか問題がないわけでもない。まず辻本氏は、既述した正学派朱子学と後期水戸学の関連を説きたいからであろう、後期水戸学——会沢安が中心となって分析されている。辻本氏の「国家主義的教育思想の源流としての水戸学」という観点に立つならば、藤田東湖『弘道館記述義』が取り上げられていないのは疑問であるが、紙幅の関係もあるので指摘するに止めたい——の儒教的(朱子学的)性格を強調しておられる。例えば、「天」や「道」といった概念が基本的に儒教的概念であることが述べられ(三一四頁)、そうした「儒教的普遍」に立脚すればこそ、会沢学が国学と異なって西洋に対する対抗論理としての体裁を有したとされている。しかしながら、他方でそれは「普遍のよそおい」であるとも述べられており、読む側にはしっくりこないものが残る。それは、恐らく辻本氏が会沢安に即してその論理を再構成するに急であって、「天」や「道」「自然」については、その論理を構成する静態的な儒教的「概念装置」にすぎないと見ているからではなか

ろうか。無論、しばしば指摘されているように後期水戸学は「危機の政治神学」であり、政治的プロパガンダとしての色彩を色濃く纏っている以上、その論理こそ問題であり、概念装置自体は中心的に分析するに値しないという見方が支配的であり、事実これまでの研究でも概念装置に立ち入っての分析は僅かであるか、あるいは徂徠学的要素や朱子学的要素の摘出に止まるという現実が存する。しかしながら、私は後期水戸学の論理もさることながら、その概念の分析がきわめて重要であると考えている。言うまでもなく、後期水戸学の論理・天皇論の中で、儒教的概念自体が変容・風化した筈であろうし、それこそ近代における儒教の展開をめぐる前提ともなる問題を提出していると考えられるからである。この意味では、寛政期以降の思想史的展開と関連において、「天」や「自然」といった概念が如何に後期水戸学へと転回し深化するのかという問題をも是非辻本氏に俎上にのせて頂きたかったと思った次第である。

ところで、後期水戸学の儒教的性格を強調することによって、辻本氏は後期水戸学と元来の儒教（中国の儒教）の有する宗教性との関連という、これまで比較的等閑視されてきた問題を抉り出した点が注目される。すなわち、辻本氏は後期水戸学の「父子分身一体の義」を「中国儒教の基盤をなした……礼教的儒教の受容」「孝の宗教的理解」と考え、死生論を説かなかった……近世儒教の弱点に、会沢に気づいていた」と見る。旧来、後期水戸学の祭祀論を国学や徂徠学から説明するのが一般的であったことを考えるならば、中国儒教における「孝」や「礼」の有する宗教性や祖先崇拜との関連で説く辻本氏の論点は独特のものであり、今後深めなければならないものであると言えよう。しかしながら、辻本氏は会沢が近世儒教の弱点に気づいていたことに続けて「つまり、近世儒教は民心を十分とらえていないと考えていたのである」（三一〇頁）としている点には若干の疑問を感じざるを得ない。何故なら、民衆に儒教が十分に浸透していたとは考えられない近世社会にあって、果たして民心統合のための祭祀という会沢の発想は中国儒教の祖先崇拜や「礼」の延長で捉えられるものかどうか疑問であるからである。確かに、辻本氏が前提として捉えている前期水戸学と「礼教的」儒教の宗教性との関連は想定されようが、会沢の祭祀論には儒教の他にもあまりにも多くの思想的要素が混入しており、これを儒教の祖先祭祀論等からのみ説明するのは無理なのではないかと思った。

この他に注目すべき点は、辻本氏が後期水戸学の主張には近世社会の武士の意識に合致するものがあったとしている点である。例えば、その攘夷論や西洋認識は、幕藩制社会にもともと内包されていた意識を前提としていた点（二七四頁）、会沢の「君臣天合」という忠孝一致論は主従関係が固定化している幕藩制下の武士にとってはむしろ定着していた意識であったことの指摘（三〇二頁）などである。後期水戸学の受容基盤に踏み込んだこうした指摘はきわめて重要であろう。辻本氏は、久留米藩における後期水戸学の受容について、こうした視点を生かして「天皇を頂点とした国家祭祀論であるよりも、やはり忠孝道徳にもとづく武士意識の喚起の側面であったことを推測させる」（三二一頁）と的確な分析を加え、それこそ「会沢国体論の思想的結節点」であったとしている。そして、国家の意識への「覚醒」も、こうした回路を経て顕現するところに近世から近代にかけての日本における国家意識の問題性を見ておられるのである。傾聴すべき見解であると思う。

以上、浅学の身であり、かつ著者に日頃からお世話になりつつも縷々私見を述べてしまった。はたして著者の意とするとところを理解し得ているか不安を禁じえないが、著者の御寛恕をお願いする次第である。

〔付記〕この書評は、近世思想史研究会の四月七日に行われた例会での発表をもとに、それを原稿化したものである。